

スピーチコンテストにおける評価方法

群馬県／安中市立松井田東中学校 教諭 福田 昇

概要

スピーチコンテストの審査評価をサブランク法で得点化し、「全体的評価」が「分析的評価」に代わる評価方法として可能か検証した。参加者は準1級レベル英語教師19人、2級レベル英語教師15人、ALT 5名であった。実験は、「a. スピーチの順位づけを行う場合、分析的評価と全体的評価との審査結果に相違はないか。b. 分析的評価よりも全体的評価の方が、評価時間は短くなるか。c. 分析的評価よりも全体的評価は評価が容易であるか」の3つを調査した。結果は、a. 2つの評価方法に高い順位相関が見られ、分析的評価は全体的評価よりも有意に得点差が生じた。b. 全体的評価は分析的評価よりも時間的に有意に評価者の負担を軽減した。評価者別に見た場合、ALTの分析的評価時間は全体的評価よりも有意に時間が長かったが、準1級レベル英語教師では有意差はなかった。c. ただし、参加者は全体的評価は分析的評価よりも評価が容易であるとは思っていないことが示された。

1 はじめに

この調査はスピーチコンテストの評価方法を、実用性の観点から「全体的評価」が「分析的評価」に代わる評価方法として可能かどうかを検証するために行うものである。英語の弁論大会の審査方法で最も一般的に用いられている評価方法は、「分析的評価」と呼ばれるものである。ご存知のように「分析的評価」というのは、英語の発音、内容、主題性など、複数の項目を立て、その項目ごとの得点の総和

をスピーチの最終得点として評価をするものである。これに対して「全体的評価」とは、評価対象を複数の項目に分割せずに、全体に対して1つの印象点で評価を与える方式である。

分析的評価ではスコア項目が細かく分かれているため、審査結果に説得力を持たせるが、発音を評価しているつもりでも声の大きさが評価に干渉していたり、文の構造を評価しているつもりでもデリバリーが干渉していたりと、配点はいくらかでも入れ替わるのが現実である。しかも採点には時間的制約が加わる。このように分析的評価は複雑であるので、経験の少ない審査員でも容易に審査でき、評価結果に第三者が聞いて矛盾のない評価法があればいいと考えている。

今回の調査では、実用性を備えた簡単な評価法である全体的評価が分析的評価に代わる可能性があるならば、評価方法の煩雑さを改善した審査方法として大会で用いたいという思いがある。昨年、大学の英語弁論大会の1審査員として審査を依頼されたとき、英語を母語とする審査員や大学教授といった方々と一緒に審査をすることになり、そのときの個人的な体験から、自分のような審査員が、一生懸命に練習してきた学生の公的な評価を分析的評価方法に慣れていないのにできるのかどうか不安なまま審査をし続ける状況に置かれ、審査方法について真剣に考えさせられたのが今回の調査をする直接の動機となっている。

2.1 全体的評価と分析的評価による評価の相違

「分析的評価」とは、口頭能力がいくつかの要素から構成されていると考え、能力を要素ごとに分析して評価する方法である。それに対して、「全体的評価」では、能力を全体として1つの総合体として見なす立場をとる。評価対象を複数の項目に分割することなく、全体に対して1つの「印象点」を与えるという方式をとる。

スピーチコンテストの審査においては、前者の分析的評価が一般的である。つまり、英語の発音やリズム、内容、デリバリーなどの複数の評価項目を得点化し、それらの総和をスピーチの最終評価とする方式である。スピーチコンテストでこの方式が広く採用されているのは、評価項目が細かく分かれているため、コンテストの審査結果に説得力を持たせることができ、個々のスピーチの良い点や悪い点を具体的に指摘できるため、判断の材料を提供できるからである(野村, 2009: 16)。しかしながら、分析的評価にはこういったメリットがあるものの、厳しい時間的制約の中で判定を下さなければならないスピーチコンテストで、この方式を採用することは必ずしも実用的であるとは言えない。スピーチの合間のごく限られた時間に複数の項目について採点する作業は決して容易なことではなく、心理的にも多くの負担を強いる。さらに、分析的評価の一般的な問題点として各評価項目の配点の重みづけによって合計点が異なってくることである。このように分析的評価は複雑であり、スピーチコンテストの評価では、評価の信頼性とその評価方法が「測定しようとしていることを本当に測定しているかどうかという度合い」(大友, 1994: 300)を示す妥当性を得ることが難しい。

しかしながら、校内大会の審査や市大会レベルの審査では現実的にはそのような時間を十分に設定することは不可能に近い状況にある。このため、特に経験のない審査員が容易に使用できるような評価方法があれば現場に携わる教職員にはかなりの負担の軽減になると思われる。このスピーチコンテストの評価方法の開発は、口頭能力を育成していきたいという今の時流の環境を整えるためにも意義のあるこ

とと考える。

なお、今回の研究では、スピーチコンテストに限定している。その背景として、これまでに述べてきた事情に加え、暗唱コンテストとスピーチコンテストの性質の違いについても指摘しておきたい。暗唱コンテストでは、参考となるテキストがあり、そのデモテープがある。このためその目標基準に準拠して、発音、アクセント、リズムなどをいかに忠実に評価できるかが問題であり、その限りにおいて複数の受験者が同一のレベルに判定されたとしても問題とはならない。むしろ同じ内容を発表することで発表者の目的基準に対しての相違点が際立ってくる。それに対して、スピーチコンテストの評価方法は、コンテストという性格上、複数の論理の展開も、個人的な体験も異なる内容を伴った複数のスピーチを比較してその優劣を比較して判定しなければならないという側面を持っている。その意味で、目標基準のある暗唱コンテストとは異なる。両者を一括して論じることは無理である。

2.2 英語を母語とする教師(NET)と日本人英語教師(JET)による評価の相違

Nakamura (1992) は、日本人英語学習者の口頭能力を評価する場合、NETとJETとでは評価の仕方に差が生じるのかをアンケート調査した。76名の大学英語教師が参加した。このうち32名はJETであり、44名はNETであった。アンケート項目は59項目から成り、すべての項目は5段階評価で回答するものであった。この項目のうち、11項目は「文法の正確さ」、「語彙」、「音素」、「イントネーション」、「流暢さ」、「談話能力」、「内容」、「話し手の自信」、「社会言語的能力」、「方略的能力」、「発話内行為能力」から成り、残りの48項目はそれぞれの11項目の低位カテゴリーを構成していた。*t*検定の結果、11項目の主カテゴリーの中では、「流暢さ」と「談話能力」においてJETとNETの間で有意差があり、JETは「流暢さ」をNETよりも重視していた。また、重要度の順位でもJETは「内容」、「イントネーション」、「語彙」であったが、NETは「流暢さ」、「談話能力」、「内容」の順であった。

Anderson-Hsieh, Johnson, and Koehler (1992) は、母語話者が非母語話者の発音に対してどのような反応をするか研究している。彼らは発音を「分

節]、「音節構造」]、「韻律」]の3つの構成要素に分け、これらの要素のうちでどれが最も母語話者の発音評価と関連が深いかを調査した。実験材料は60のスピーチサンプルを録音したものである。使用した音読テープは男性のみによって吹き込まれたものであった。これを3人の評価経験者が評価した。その結果、発音評価と最も相関関係が深かったのは韻律であることが示された。この実験では分節と音節構造は数量化できるが、韻律は評価者の主観的判断が高く評価基準の一貫性に欠ける課題があるとしている。高梨(1996)は、スピーチ評価には、母語話者同士、非母語話者同士で類似性が見られるが、母語話者と非母語話者との間ではあまり類似性が見られないとしている。

以上のことを本研究に当てはめると、日本人英語教師はALT (Assistant Language Teacher) よりも内容を重視し、ALTは流暢さや談話能力に評価を与えると考える。

2.3 第2言語としての英語教師 (ESL) と非英語教師による評価の相違

Hadden (1991) は、第2言語としての英語教育で、経験の相違がコミュニケーション能力の評価にどのような影響が出るのかを調査した。参加者はアメリカの大学院に入学した上級のESLクラスに在籍する8名の中国人であった。彼らに5分間の準備を与えてから原稿なしに最大3分30秒のスピーチをしてもらい、それを録音したものを25名のESL教師と32名の非英語教師に見てもらい、その後24項目のビデオについてのアンケート調査を行った。英語で何が重要と考えているかという質問項目に対して、ESL教師は「理解度」を最も重視し、「社会的受容度」、「言語能力」、「人柄」、「ボディ・ランゲージ」の順となった。一方、非英語教師では、「理解度」「言語能力」はほぼ同程度に重視され、「社会的受容度」、「ボディ・ランゲージ」、「人柄」の順となった。また、非英語教師の方がESL教師よりも全体的に寛容な評価をしていることが示された。特に「言語能力」は非英語教師の方がESL教師よりも発表者の評価を有意に高く評価していることが示された。

以上のことより、ALTは理解度を重視し、日本人英語教師では、英語能力をALTよりも有意に高く評価する傾向があると考えられる。

3 仮説

本研究では、日本人英語教師とALTのスピーチコンテストにおける評価方法に対する調査結果から得られる、以下の3つの仮説を掲げる。

- 1) スピーチの順位づけを行う場合、分析的評価と全体的評価との審査結果に相違はない。
- 2) 分析的評価よりも全体的評価の方が、評価に用いる時間は短くなる。
- 3) 分析的評価よりも全体的評価の方が、より評価が容易である。

4 研究の方法

4.1 被験者

本研究は対象として日本人英語教師とALTを想定した。また、スピーチ審査員としての日本人英語教師の英語能力差(英検準1級と英検2級レベル)がALTの審査結果との相違に影響を与えるのかどうかも比較したいと考えた。このため準1級レベル以上の英語教師、2級レベルの英語教師、ALTを審査員として考えた。しかしながら、5.2節の実験材料にもあるように本研究の調査にはかなりの時間を要するため、実際に調査に協力してくれる被験者を確保することがかなり難しい。このため、市の英語部会やさまざまな英語研究会へ参加し、協力を呼びかけた。直接学校訪問をして調査協力をお願いして実験材料を手渡すか、郵送などで送付したものは80名を超えた。しかしながら、最終的にすべての実験に参加した被験者数は、準1級レベル以上の英語教師19人、2級レベルの英語教師15人、ALT5名であった。

4.2 スピーチ審査方法

被験者には一定の要領でスピーチの評価をしてもらうため、実験にかかわる手順を被験者のところに直接出向いた上で口頭説明して行った。また、それが無理な場合は、実験を効率的に行えるように手順を箇条書きにした説明書を同封した(資料1, 2)。スピーチ評価の集計方法と評価項目については以下のとおりである。

■ 表 1：審査集計方法の比較

	メリット	デメリット
得点集計法	審査員全体の合計点の数字が細かく得点差が出やすいため、順位がわかりやすい。	ある発表者に対して極端に高い得点や低い得点をつける審査員が出た場合、他の複数の審査員の評価を上回る影響を持つことがある。
順位集計法	計算が簡単であることから結果の集計に時間がかからない。	合計点の数字の少ないものが上位となるが、集計の結果、合計点が同一となることが起こりやすい。
サブランク法	得点集計法のデメリットである極端な得点差の影響を最小に抑えることができる。	審査員個々に集計を行った後、上位の発表者から重み付け得点を加え、その作業を全審査員の得点に対して行うため、集計時間を多く要する。
Toastmasters法	サブランク法の1つであるが、審査員は上位3名の名前だけを報告するため、集計係が細かな得点の集計作業を必要とせず、迅速に結果が出る。	主催者あるいは実行委員会側が各審査員の与えた実際の得点や分析評価を把握したり資料として残していくことができない。

4.2.1 スピーチ評価の集計方法

スピーチコンテストの集計方法は野村（2009）によれば大きく3つの方法がある。それぞれのメリットとデメリットは表1のとおりである。本実験では得点の影響差を最小に抑えるため、サブランク法を用いた。まず、評価者ごとの得点をもとに、それぞれ上位1位～3位までを決めた。それをもとに1位には10点、2位には8点、3位には6点を割り当てた。また、評価者の得点と同じであった場合は、その順位から1点を引いて割り当てた。例えば、2位が2人であった場合は、それぞれに8-1=7点を与えた。その後、評価者ごとの順位から与えられたスピーチ者の得点総計を求めた。これをもとに1位～10位までの順位を決定した。

4.2.2 スピーチの評価項目

評価項目については、「全体的評価」では10人のそれぞれの全体的な印象を100点満点でつける形にした（資料3、4）。一方、「分析的評価」ではRobson（2008）を参考にした。彼はスピーチコンテストの審査員のレポートをもとに、分析的評価の項目の難易度を調査した（表2）。それによれば、最も審査が難しいのは「話題の内容への興味」であった。話題の内容に興味を引くかどうかは、評価項目として最も大切であるが評価規準を設定することが困難であるとされた。一方、最も審査が容易であるのは「音声」であった。また、ジェスチャーとアイコンタクトの評価については審査員により評価項目の対象とすべきか意見が分かれた。ジェスチャーはスピーチにそれほど必要とされるものではないというものや、アイコンタクトは評価としてあまり加点しないという審査員もいた。これらのこと

から、デリバリーの中からジェスチャーとアイコンタクトとの2つを排除することとした。そのため、実験材料としてのスピーチ発表者はDVDではなく音声のみのCD録音とした。「分析的評価」の評価項目のその他の項目については決まったものはないので、できるだけ多くの有名な伝統あるコンテストの分析的評価表の実例を参考（トースト・マスターズのスピーチ評価表、高円宮杯スピーチ評価表、高崎市長杯大学スピーチ評価表、立命館スピーチ評価表）にして作成した。

■ 表 2：審査員のレポートによる6つの評価項目の難易度

Criteria	Severity	
Interest	0.51	harder to be scored high
Body Language	0.36	↑
Eye contact	0.03	
Organization	-0.07	
Pronunciation	-0.16	
Voice	-0.67	easy to be scored high

本研究では、過去3年間にわたってスピーチ指導に携わったALTと協議した上で、これらの評価項目の実例をもとにいくつかの項目を改訂した。項目別スピーチ評価表を作るにあたって、最も協議時間をかけた点は、本研究のための分析的評価の評価項目をどうするか、またその評価点をどのくらいにするかであった。英語学習の初期レベルである中学生は社会人や大学生のスピーチとは評価項目の比重配点は当然のことながら変えるべきであるということであった。また、中学生がスピーチを行うにあたって私たちはその評価項目が教育的な配慮に基づいて行うべきであろうという結論に達した。例えば、英

語学習の初期である中学生にとって困難な単語レベルでの発音 (that の th, practice の pr, exactly の ly など) の評価や文レベルでのリズム, パラグラフを1つのまとまりとして文の抑揚や強弱などまで意識して読んでいくことへの評価など, 配点の比重が社会人や大学生のスピーチ評価表とは少し異なっている(資料5, 6)。この結果, 分析的評価では10人のそれぞれのスピーチに対して文の内容にかかわる3つの項目40点と英語の発音や表現にかかわる2つの項目60点, 総計100点満点でつけることとした。この分析的評価項目を決めるにあたり, 他のスピーチコンテスト評価表を参照し, ALT や教職者と協議したため, 項目内容を決定するまで多くの時間を要した。

4.3 実験材料

実際のスピーチコンテストで平成21年~23年までの3年間で県大会上位レベルあるいはそれに相当するレベルでの対外的コンテストに入賞した10人のスピーチをCD録音したものを用意した。またスピーチ指導はすべて同じ指導者の日本人英語教師であり, 補助として指導にかかわったALTもカナダのブリティッシュコロンビア地域出身者である。スピーチの長さはすべて4:00~4:33以内に収まるように編集してある。男女による性差の影響を極力避けるために男女のバランスを考慮したが, 入賞者レベルに限定したため, 録音した生徒は男4名, 女6名となった。また, CDに録音した順番は男女を極力交互に収録してある。収録したスピーチ10人分のすべてを単純に聞くだけで43分37秒かかる。それに評価に要する時間がこれに加わる。全体的評価と分析的評価を別々の日に2回に分けて10人分のCDを聞くことを考えれば, これだけで合計2時間以上を要する。さらに, 最後にアンケートを実施するため, それに要する時間を10分程度見ておく必要がある。また, 実験にかかわる手順を理解する時間を含めるとさらに時間が必要である。時期をずらして同一の被験者に2度CDを聞いてもらわなければならないため, 被験者はこの実験に要する総時間を長すぎると感じるかもしれない。しかし, スピーチ数を減らすと今度はスピーチの実験の調査実態から離れてしまうので, やむを得ないと判断した。

4.4 実験の手順

本実験は評価者の得点の平均値をもとに, ①発表者の結果順位と②評価者の2つの異なった評価方法による評価をするまでにかかった時間の相違を分散分析で検証した。①は評価者(3:ALT, 準1級, 2級)×発表者(10:Ms A~Ms J)×評価方法(2:全体的評価, 分析的評価)の3要因混合計画(AsBC)で, ②は評価者×評価方法による2要因混合計画(AsB)で分散分析を行った。混合にしたのは, 被験者の数を少なくすることができ, また等質化の手続きも不要となる利点があったからである。ただし, 被験者内計画では1回目の実験が2回目の実験の練習になってしまう「練習効果」が生じる可能性がある。このため, 分析的評価と全体的評価の間の日数を1週間程度以上空け, CDの録音順を, カウンターバランスした。

4.5 アンケート調査

2回目の実験後にアンケートを実施した(資料7, 8)。

5 データ分析

5.1 仮説1の検証

「スピーチの順位づけを行う場合, 分析的評価と全体的評価との審査結果に相違はない」

統計的有意差を検証するため, 評価得点の平均値をもとに, 評価者(3:ALT, 準1級, 2級)×発表者(10:Ms A~Ms J)×評価方法(2:全体的評価, 分析的評価)の分散分析(AsBC)を行った(表3, 表4, 図1)。

その結果, 評価者(3:ALT, 準1級, 2級)×発表者(10:Ms A~Ms J)の交互作用が有意であった($F(18, 324) = 2.44, p < .01$)が, その他の交互作用および評価者の主効果は有意ではなかった。評価方法(全体的評価, 分析的評価)の主効果と発表者の主効果のみが有意であった(それぞれ $F(1, 36) = 4.82, p < .01$; $F(9, 324) = 5.60, p < .01$)。

評価者(3:ALT, 準1級, 2級)×発表者(10:Ms A~Ms J)の交互作用が有意であったので, 評価者別に発表者ごとの単純主効果を検定した(図2)。

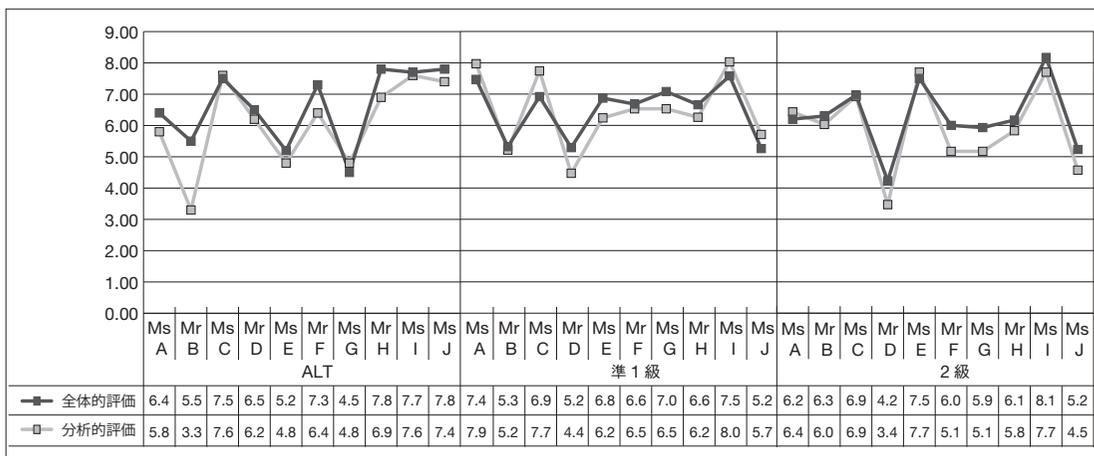
その結果, 発表者 Mr D, Ms E, Ms G, Ms J の

■ 表 3：分析的評価のサブランク法による評価者の評価得点の平均値

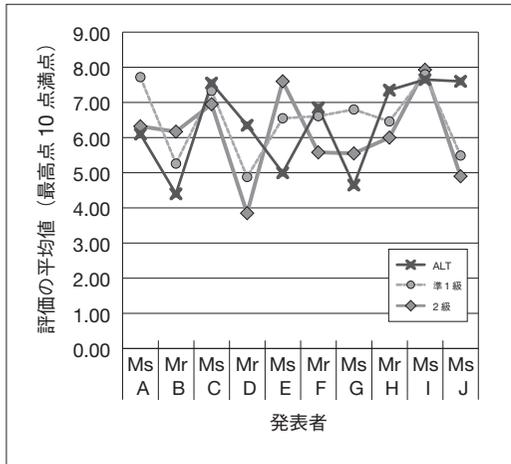
発表者	評価者 (分析的評価)											
	ALT (5人)			準 1 級 (19人)			2 級 (15人)			全体 (39人)		
	Mean	SD	順位	Mean	SD	順位	Mean	SD	順位	Mean	SD	順位
Ms A	5.80	1.72	6	7.97	2.02	2	6.43	2.45	3	6.74	2.06	3
Mr B	3.30	2.68	8	5.21	1.91	8	6.03	2.28	4	4.85	2.29	9
Ms C	7.60	1.85	1	7.74	1.74	3	6.93	2.10	2	7.42	1.90	2
Mr D	6.20	2.04	5	4.47	1.75	9	3.47	1.86	8	4.71	1.88	10
Ms E	4.80	2.04	7	6.24	2.18	6	7.70	1.58	1	6.25	1.93	5
Mr F	6.40	1.74	4	6.53	2.09	4	5.17	2.73	6	6.03	2.19	6
Ms G	4.80	2.16	7	6.53	2.50	4	5.17	2.01	6	5.50	2.22	8
Mr H	6.90	2.44	3	6.26	2.27	5	5.83	2.49	5	6.33	2.40	4
Ms I	7.60	1.98	1	8.03	1.27	1	7.70	2.23	1	7.78	1.83	1
Ms J	7.40	2.42	2	5.71	2.22	7	4.57	2.54	7	5.89	2.39	7

■ 表 4：全体的評価のサブランク法による評価者の評価得点の平均値

発表者	評価者 (全体的評価)											
	ALT (5人)			準 1 級 (19人)			2 級 (15人)			全体 (39人)		
	Mean	SD	順位	Mean	SD	順位	Mean	SD	順位	Mean	SD	順位
Ms A	6.40	2.18	6	7.47	2.14	2	6.20	2.10	5	6.69	2.14	4
Mr B	5.50	2.14	7	5.32	1.73	8	6.30	2.16	4	5.71	2.01	9
Ms C	7.50	1.48	3	6.92	1.46	4	6.97	1.96	3	7.13	1.64	2
Mr D	6.50	2.30	5	5.29	1.43	9	4.23	1.67	10	5.34	1.80	10
Ms E	5.20	2.23	8	6.87	1.75	5	7.50	2.05	2	6.52	2.01	6
Mr F	7.30	0.75	4	6.68	2.02	6	6.00	2.11	7	6.66	1.63	5
Ms G	4.50	3.00	9	7.08	1.95	3	5.93	1.88	8	5.84	2.28	8
Mr H	7.80	1.57	1	6.66	1.93	7	6.17	2.49	6	6.87	2.00	3
Ms I	7.70	1.72	2	7.58	1.44	1	8.17	1.83	1	7.82	1.67	1
Ms J	7.80	2.11	1	5.26	1.85	10	5.23	2.10	9	6.10	2.02	7



▶ 図 1：全体的評価と分析的評価の評価者群ごとの平均値



▶ 図2: サブランク法の評価得点による評価者別に見た発表者の評価平均値

4名の評価得点で有意に評価の差があることがわかった（それぞれ $F(2, 36) = 6.20, p < .01; 4.98, p < .05; 2.68, p < .10; 4.93, p < .05$ ）。次に評価者ごとの水準別誤差項を用いて群の単純主効果を検定した。その結果、ALT、準1級、2級の、それぞれの評価者群は発表者に有意に評価得点で差をつけていることが示された（それぞれ $p < .01$ で $F(9, 324) = 4.10; 2.58; 3, 80$ ）。LSD法を用いた多重比較によれば Mr D および Ms J に対して ALT は他の2つの評価者よりも有意に高く（それぞれ $p < .05$ で $MSe = 4.78; MSe = 7.69$ ）、Ms E に対して2級の評価者はALTの評価者よりも有意に高く評価得点をつけていた（ $MSe = 6.46, p < .05$ ）。また、Ms G に対して準1級の評価者はALTよりも有意に高く評価得点をつけていたことが示された（ $MSe = 7.69, p < .05$ ）。それ以外の発表者に対しては評価者群の間に有意差はなかった。

分析的評価と全体的評価で、それぞれ審査評価者から出された得点の平均値をもとに1～10位の順位に相関があるかどうかを検定するためスピアマンの順位相関係数（the Spearman Rank-order Correlation）を用いた。結果は表5のとおりであった。分析的評価と全体的評価の間には各評価者に対して、それぞれ正の相関が1%水準で有意に認められた。

以上の結果から、分析的評価と全体的評価とでは発表者の評価得点に関して有意な差が生じることが示された。このことは分析的評価が全体的評価よりも発表者への評価得点の差が大きくなることを示し

■ 表5: 審査の評価にかかわる変数の相関分析結果

評価者	分析的評価	全体的評価
ALT	1	.856**
	.856**	1
準1級	1	.900**
	.900**	1
2級	1	.982**
	.982**	1
全体	1	.900**
	.900**	1

** 相関係数は $p < .01$ 水準で有意（両側）。

ている。しかしながら、分析的評価と全体的評価のALT、準1級、2級といった評価者内、あるいは評価者全体での発表者の順位づけに関しては極めて高い順位相関があることが示された。また、ALT、準1級、2級といった評価者間では分析的評価と全体的評価で特定の発表者（10人中4名）の評価得点で有意に評価差があることが示された。

5.2 仮説2の検証

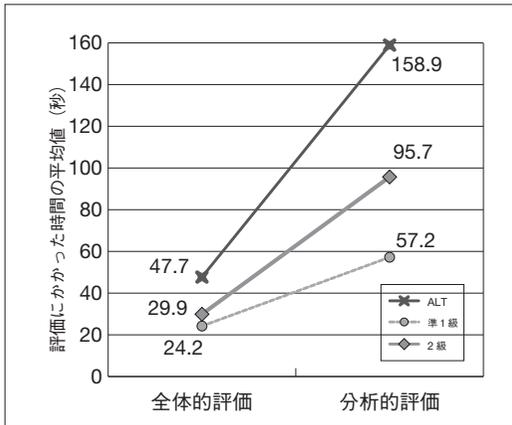
「分析的評価よりも全体的評価の方が、評価に用いる時間は短くなる」

これを証明するために、評価者がそれぞれスピーチの評価にかかわる時間を記録しておいたものをもとに、その平均値の差を比較し、全体的評価にかかる時間の方が統計的に有意に短いかどうかを調査した。まず、分析的評価と全体的評価の、それぞれの評価方式ごとに、すべてのスピーチの評価に費やした合計時間（秒）の平均値とその標準偏差を求めた。それらの数値をもとに、2要因混合計画（AsB）の分散分析を行った。評価者がスピーチの評価を行ったときに記録されている時間はスピーチの評価にかかった時間と聞いている間の時間が合計されていたため、「評価者がスピーチごとにかかった時間」から「スピーチを聞いている時間」を差し引いたものをデータとした。評価者別に見た評価方法と評価時間の平均値の結果は以下のとおりであった（表6、図3）。

評価者(3) × 評価方法(2)の交互作用が有意であった（ $F(2, 36) = 3.37, p < .05$ ）。評価方法の単純主効果を検定したところ、準1級レベルでは全体的評価と分析的評価にかかる時間に有意差はなかった（ $F(1, 36) = 2.39$ ）。しかし2級レベルとALTではど

■ 表 6：評価者別に見た評価方法と評価時間

評価者	n	全体的評価		分析的評価	
		Mean	SD	Mean	SD
準 1 級	19	24.18	11.88	57.24	29.09
2 級	15	29.89	20.01	95.67	69.05
ALT	5	47.66	36.08	158.88	114.68



▶ 図 3：評価方法と評価時間の比較

こちらも評価方法に対して有意差が見られた（それぞれ $F(1, 36) = 9.47, 27.07, p < .01$ ）。LSD 法による多重比較の結果、全体的評価にかかる時間では準 1 級 < ALT であり、準 1 と 2 級および 2 級と ALT との間に有意差はなかった。項目別評価にかかる時間では準 1・2 級 < ALT であり、準 1 と 2 級の間に有意差はなかった。

以上のことから、ALT は評価方法の両方において準 1 級よりも有意に評価時間がかかっていることが示されたのに対して、準 1 級と 2 級とでは評価方法において評価時間に有意差はなかったことが示された。

5.3 仮説 3 の検証

「分析的評価よりも全体的評価の方が、より評価が容易である」

五件法を用いたアンケートの質問事項の中で、「全体的評価は分析的評価よりも評価が簡単に行えると思う」という項目を、カイ二乗検定を用いて検証した。アンケート項目は、ABCDE の 5 段階で評点した。評価基準は A が「全くそう思わない」、B が「ややそう思わない」、C が「どちらでもない」、D が「ややそう思う」、E が「全くそう思う」であった。この項目に対する回答は以下のとおりであった（表 7）。

■ 表 7：「全体的評価は分析的評価より容易である」という項目への回答数

	A	B	C	D	E
準 1 級	0	5	7	4	3
2 級	3	2	2	4	4
ALT	1	0	2	2	0

カイ二乗検定の結果、人数の偏りは有意ではなかった ($\chi^2(8) = 9.68, ns$)。残差分析によると（表 8）、評価点 D の 2 級が 0.08 で有意傾向ではあるが、総じて有意差はなかったことが示された。

■ 表 8：表 3 の各セルの標準化された残差

	A	B	C	D	E
準 1 級	-1.40	0.86	0.71	-0.39	-0.22
2 級	1.18	-0.42	-1.08	0.08	0.80
ALT	0.68	-0.95	0.50	0.63	-0.95

5.4 「スピーチ評価に関するアンケート調査」から

5.4.1 全体的評価の評価観点

全体的評価の評価観点は評価者独自により設定されるため、重点項目はさまざまであったが、それでも、ALT、準 1 級、2 級といった各評価者間別に見た場合、おおむね以下のような部分で共通する重点項目があった（表 9）。これを見てわかるように、ALT、準 1 級、そして 2 級の評価者では評価に対する重点項目が異なっているが、ALT に対して、日本人評価者間では評価の重点項目はほとんど同じであることがわかる。

5.4.2 全体的評価と分析的評価に対するコメント

全体的評価と分析的評価の、それぞれ異なった評価方法を実際に終えた評価者は、2 つの評価方法のそれぞれに対していくつかの疑問点を抱いたようである。以下に、分析的評価と全体的評価に対する評価方法の疑問点について、その主だったものを載せる。

1) 全体的評価を支持するコメント

a. 分析的評価について考えると、短時間で、このような参加者の分量のスピーチ内容をいかに検討し、評価できるのか疑問に思う。一般の日本

■ 表 9：全体的評価で評価者が独自に重視した評価項目

全体的評価での重点評価項目	ALT	準1級	2級
導入部 (introduction)	独創的な話題である。	的を絞った話題である。	的を絞った話題である。
展開部 (body)	話の内容を支える理由づけが明確である。	個人的な体験例が豊富である。	個人的な体験例が豊富である。
結論部 (conclusion)	効果的な終わり方である。	効果的な終わり方である。	話の始まりの導入部と結論部が関連した要約になっている。
運用能力 (delivery)	声量がある。	熱意を持った話し方をしている。	熱意を持った話し方をしている。

人英語教員で考えれば、正確な項目ごとの評価は不可能と思う。そもそも日本語の作文を読んでも、内容の評価は、個々の判断で異なるのが普通である。分析的評価なら、項目数で言えば、内容、英語、表現力の3つもあれば十分かと思う。そういう意味では、全体的評価の方がむしろ公平なのではないか。例えば、評価者として自分では内容に比重を置いて評価したくても、分析的評価では英語の発音や話し方に得点の重点が置かれている場合、自分の意に反した発表者が上位に入ってしまう結果になる。このため、分析的評価では無意識のうちに英語の発音や話し方の項目得点を操作し、全体的に低い得点にしていた気がする。結局、どんな評価方法を用いても評価者の意図が点数に反映するのではないだろうか。

- b. 分析的評価は項目の観点別に配点が決まっています。端的に言えば評価者ではなく別の人が決めた配点に合わせて評価するため、評価者のスピーチの印象が自分の考えとずれて配点してしまう気がする。
- c. スピーチ評価は何回もしているが、評価そのものについていえば、英語の発音評価は聞いてすぐわかる。運用能力 (delivery) はすぐにはわからないため大体スピーチの半分以上を聞いてから決める。内容 (content) は全体を聞いてから決める。そう考えると、内容以外のほとんどすべてはスピーチが開始して半分くらいですべて評価が終わっているということになる。最終的評価が内容で、それが印象的な得点としてすべてに影響を与えるから、分析的評価は内容の総合点からマイナスするような形で点数の分配をする気がする。
- d. 分析的評価をする場合、英語を母語とする人と

そうではない日本人とでは文化的な、固有の価値観の相違 (発音、内容の背景理解の困難さなど) が入ってくると思う。固有の価値観は審査員がそう簡単には変えられないものだから、結局、得点差を出すには技能を伸ばすしかないのではないか。あるいは最初から英語圏固有の文化を意識した内容で勝負するべきなのかもしれない。

- e. 分析的評価を実際に公的な場で審査員として立ち会うとわかるが、英語の発音評価項目 (pronunciation) と運用能力 (delivery) の項目があった場合、自分で一番強く訴えたいことを意識的にゆっくりと強く発音した場合、個々の単語の発音が正確でなくても、運用能力を高く評価する (結果として pronunciation よりも delivery 項目で評価) のか。あるいはあくまで発音が正確でないのだから発音評価項目を低くする (結果として delivery 項目を無視して pronunciation 項目で評価) のか。結局は審査員の印象や主観に依存することになる。
- f. 最終的には、評価の観点をあまり細かく分けずに、全体的に見た印象から、総合的に、数項目くらいに絞って単純化した評価項目で評価し、備考欄に審査員の評価で印象深かった点を書くことがフィードバックを含めて考えてもよいのではないだろうか。

2) 全体的評価への否定的意見

- a. 全体的評価方法の場合、自分の中ではスピーチ展開部での体験例の評価を重点とした。このため、評価基準となる体験例が具体的でないスピーチは、評価得点にかなり影響を与えた気がする。評価をするのに時間がかかったケースは体験例がない場合に集中していた。自分が悩んでいる時間そのものが時間計測として出てきたという

ことになる。

- b. 評価者の立場で言うと、実際に評価経験が少ない場合、何に重点を置いてよいかわからないため、重点項目次第で評価結果が異なると思う。私はスピーチの導入部で、的を絞った導入をしたスピーチで印象深いものに配点が高くなった気がする。配点が決められた分析的評価では、項目ごとに配点が割り振られているから、評価をより客観的に評価できると感じた。特に評価そのものあまり自信がないものにとっては、点数配点が事前に割り当てられていることは配点に対して公平性を感じる。
- c. 全体的評価はフィーリングでつけることになるので点数化をしてもそれがいつも優柔不断で変化する気がしてしかたがない。点数配分をスピーチごとに変えている気がする。点数化する時間は分析的評価よりも早い、信頼性に疑問が残る。しかしながら、分析的評価は項目が多く、評価に時間がかかるため、考えている間に心が変化してしまうという問題もある気がする。それでも全体的評価よりはまだ信頼性は高い気がする。あくまで消去法から見た判断である。ここから述べるコメントは本研究のテーマからすると、外れると思うが、スピーチ評価は熱心に取り組んだ参加者への学習動機を高めるための目的もあるのではないかと思う。自分のスピーチのどこが良くてどこが悪いのかを知る機会を与えるために、評価結果を返却することが学習動機をさらに高めるチャンスとなる。その点では、全体的評価は学習者へのフィードバックの面から、明確な項目分類がないため、その役目を果たせないと思う。

6 結果と考察

仮説検証1の結果から、サブランク法による評価得点では、分析的評価は全体的評価よりも評価得点の差が大きくなるが、分析的評価と全体的評価のどちらを用いても、ALT、準1級、2級といった各評価者内、あるいは評価者全体での発表者の順位づけに関しては極めて高い順位相関があることが示された。分析的評価に比較して全体的評価で評価得点差が少なくなるのは、全体的評価は評価項目がないため、発表者のスピーチを聞きながら評価観点を評価

者が独自に作っていく必要があるため、無意識のうちに評価得点差が少なくなるのかもしれない。今回の調査では、Mr D、Ms E、Ms G、Ms Jの4名の評価が、ALTと日本人評価者間で有意に差が生じていた。この点について少し考えてみたい。10名のスピーチのうち、この4名のスピーチ内容に関しては人の生死を扱ったもの(3)とthirteenという数字からイメージする宗教上の話(1)が含まれているものである。有意差がなかった残りの6つの内容に関しては、母への愛(2)、医師への尊敬(1)、兄弟愛(1)、父への愛(1)、教育の大切さ(1)であった。愛情は国籍に関係なく同じ価値観を持ちやすいが、死生観は宗教的思考に支配されている部分がかかなりある。宗教そのものの価値観は人の信条によりさらに大きな差になるのは当然の理である。評価得点差は愛情→死生観→宗教観の順に大きくなるのかもしれない。今回、4名の評価が他の6名と比較してALTと日本人評価者で大きな差が生じたのはこういった宗教的な価値観から影響を受けた文化的な相違があるのかもしれない。

仮説検証2の結果から、評価者全体として見ると、全体的評価は分析的評価よりも時間的に有意に評価者の負担を軽減していることが示された。また、評価者別に見た場合、ALTの分析的評価にかかる時間が全体的評価よりも極めて長くかかっていることが示されたが、準1級では有意差はなかった。

仮説検証3の結果から、評価者は必ずしも全体的評価は分析的評価よりも評価が容易であるとは思っていないことが示された。この理由として、評価者の評価後のコメントを借りれば、「全体的評価では、評価に対する観点項目を自分で設定しなければならぬため、審査基準に対する精神的負担がかえって高くなる」ことを挙げている。また「たとえ評価項目を設定しても発表者の内容を聞きながら、その評価の重点項目が常に変化してしまうため、評価項目に一貫性がない審査結果になってしまっていることが不安である」としている。

今回の被験者からの研究結果では、サブランク法による評価得点では、分析的評価は全体的評価よりも評価得点の差が大きくなるが、分析的評価と全体的評価のどちらを用いても、評価順位に関しては極めて高い順位相関があり、全体的評価は分析的評価よりも時間的に有意に評価者の負担を軽減しているが、評価者は必ずしも全体的評価は分析的評価より

も評価が容易であるとは思っていないことが示された。

7 今後の教育的示唆

実際の公的な日本でのスピーチ大会を考えた場合、評価者は通常 ALT と日本人の混合メンバーである。スピーチ発表者の立場から言えば、ALT と日本人の評価者のどちらからも評価の差の生じづらいもの、例えば母に対する愛といったことをスピーチ内容とすることが望ましいのかもしれない。このような評価者の文化的価値観による相違が評価に与える影響を検証することも必要であると思われるが、本研究はスピーチ評価の実用性に焦点を当てたものであり、この点の検討は今後の研究課題としていきたいと考えている。

中学生の英語スピーチ発表者は、ALT や日本人英語教師の支援のもとで、時間をかけて原稿を準備し、英文の発音練習や文の抑揚など、さまざまな問題点を繰り返し練習して改善する。そして、やっと自分のものとなった英語を用いて聴衆の前に立つ。生徒のスピーチ指導をしてきた英語教師にとって、そこには生徒とともに共有し合う時間が存在している。当然のことながら、スピーチ大会の運営上、毎回最

も頭を悩ますのは審査の評価方法と審査員の決定である。コンテストに出場してくる生徒は中学3年生が多い。生徒にとっては1回限りかもしれない大会でどのような評価をするのか。完璧な審査員というのは存在しない。審査員の評価結果がすべて同じ順位をつけるということもまれである。しかし審査を公的評価であろうとすれば、その審査にも基準が必要である。今回の調査ではサブランク法により分析的評価と全体的評価を調査したが、評価法だけでなく得点集計法の調査も必要である。また、本研究ではCD録音の音声評価であり、アイコンタクトやジェスチャーといったデリバリー項目は含まれていない。そのため、それらを含めた評価では異なった評価結果が出たかもしれない。いずれにしても本研究が今後のスピーチ評価への審査を再考するきっかけとなれば幸いである。

謝 辞

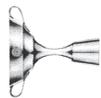
今回、このような機会を与えてくださいました公益財団法人日本英語検定協会の関係者の皆様、選考委員の先生方に厚くお礼を申し上げます。特に、長勝彦先生には有益なご助言を賜りました。また、本研究にあたりまして、多方面の先生方からの貴重なご意見とご協力をいただきました(資料9)。本当にありがとうございました。

参考文献(*は引用文献)

- * Anderson-Hsieh, J., Johnson, R., & Koehler, K. (1992). The relationship between native speaker judgments of nonnative pronunciation and deviance in segmentals, prosody, and syllable structure. *Language Learning*, 42, 4, 529-555.
- * Hadden, B.L. (1991). Teacher and nonteacher perceptions of second-language communication. *Language Learning*, 41, 1, 1-24.
- * Nakamura, Y. (1992). Differences in native and non-native teachers' evaluation of Japanese students' English speaking ability. *Cross Currents*, 19, 2, 161-165.

- * 野村和宏. (2009). 「英語スピーチコンテストの課題—より教育的な活動とするために—」. 神戸外大論叢, 第60巻第5号, 1-26.
- * 大友賢二. (1994). 「言語テストと第二言語」. 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』. 東京: 大修館書店.
- * Robson, G.G. (2008). Applying Rasch Measurement to Judged Ratings From a Speech Contest at a Japanese University. *JACET Journal*, 47, 51-66.
- * 高梨庸雄. (1996). 「身近なコミュニケーション14」. 『現代英語教育』. 1月号, 42-43. 東京: 研究社.

資料 1：英語の弁論大会の審査方法の研究



英語の弁論大会の審査方法の研究

安中市立 松井田東中学校
英語科 教諭 福田 昇

この調査はスピーチ・コンテストの評価方法のための調査協力ありがとうございました。この調査はスピーチ・コンテストの評価方法を、実用性の観点から「全体的評価」が「分析的評価」に代わる評価方法として可能かどうかを検証するために必要なものです。

【この調査を行う理由】

英語の弁論大会の審査方法で最も一般的に用いられている評価方法は、「分析的評価」とよばれるものです。ご存じのように「分析的評価」というのは、英語の発音、内容、主題性など、複数の項目を立て、その項目ごとの得点の総和をスピーチの最終得点として評価をするものです。これに対し「全体的評価」とは評価対象を複数の項目に分割せずに、全体に対して1つの印象点で評価を与える方式です。

分析的評価ではスコア項目が細かく分かれているため、審査結果に誤差を生かせるのですが、発音を評価しているつもりでも声の大きさが評価に干渉していたり、文の構造を評価しているつもりでもデリバリが干渉していたり、配点はいくらでも入れ替わるのが理実です。しかも採点には時間的制約が加わります。分析的評価は複雑であり、経験の少ない審査員でも容易に審査でき、評価結果に第三者が聞いて矛盾のない評価法があればいいと考えています。

今回の調査では、実用性を備えた簡易な審査方法である全体的評価が分析的評価に代わる可能性があるならば、評価方法の煩雑さを改善した審査方法として大会で用いたいという思いがあります。この点についてデータを集計し、統計的数値に基づいて私の考えが正しいのかどうかを確認したいのです。そのため、スピーチ・コンテストで行われる、2つの評価方法について、ぜひご協力をいただきたく思います。

「分析的評価」方法は、実際に自分が審査員のひとりとして、公式の大会で審査をしてみるとよくわかるのですが、評価方法の基準が項目ごとの明確に分離されているだけに、かえって自分のなかで分析的に得点の配分がうまくできないうのです。そして得点の配分に悩んでいるうちに次の発表者がステージに上がってくるような状況に置かれていきます。

昨年、大学の英語弁論大会の1審査員として審査をしたことになったとき、英語を母語とする審査員や大学教授といった方々と審査員をすることになり、そのときの私の個人的な体験から、自分のような審査員が、一生懸命に練習してきた学生の公的評価を「分析的評価」方法でできるのかどうか不安なまま審査を続けられている状況に置かれ、審査方法について真剣に考えさせられたのも今回の調査をする動機となっています。

【補足説明】

- ① 今回のスピーチは、スピーチを暗唱したばかりのときに録音をしたものです。そのため、発音や英文のリズム上おかしなものが顕著に観察されるので評価が出やすいと思います。
- ② 評価者を2つ(日本人英語教師とALT)に分けてその評価結果の相違も比較検証をします。
- ③ この収録スピーチは、実際に市大会レベル以上のコンテストに参加し、入賞をしたものを集めてあります。つまり、10人のスピーチは学習意欲があつて、しかも矯正することが難しい中学生のスピーチ課題を明らかにする良い教材であると思います。
- ④ スピーチ発表者の指導は同一の日本人教師とカナダ出身のALTが行っています。つまり、対象とする生徒のスピーチは比較的統一された指導を受けていると思われる。

資料 2：実験の手順について

実験の手順について



実験に協力をいただきたいのは次の2つです。

- 1) 審査の分析的評価と全体的評価の得点と、それぞれの審査方法にかかる時間
- 2) アンケート ※注：アンケートは全体的評価と分析的評価が終わった後にお願いたします。

【審査得点の方法】

- ① 同封いたしました Audio CD には10人の中学生のスピーチが収録されています。スピーチの長さはひとひと94秒ほどの長さです。CDラジカセかパソコンで聴いてください。イヤフォンで聴いた方が音質はいいかもしれません。
- ② 全体的評価と分析的評価のどちらかに先に聴いていただいても構いません。スピーチ原稿は見ても見なくても構いませんが、評価をするとき、CDはそれぞれ1回のみで聴いて評価してください。評価をしている間はもって聴きなおすことはしないでください。一人ひとりのスピーチごとに得点を書いてください。
- ③ 審査方法は全体的評価と分析的評価の2つの評価を、どちらかはじめても構いませんが、2つの評価の間は少なくとも6日以上あけてください。
- ④ 全体的評価はスピーチの印象から100点満点を最高として、得点化をしてください。分析的評価では項目ごとに得点化をしてください。

【計測時間の書き方】

分析的評価と全体的評価のどちらの評価方法でも、CDのスタートとスタートと同時に時間表示がストップするまで計測し、評価得点が書き終わるまでの時間を書いてください。たとえば、CDのスタートが4分10秒の間流れたあと、CDをいったん止めて評価得点を考えていて、その審査時間が4分05秒かかったなら、審査用紙に5分15秒と書き入れて下さい。簡易に言えば、

スピーチの放送時間 + 審査している時間 = 記録時間
(例) 4:10 + 1:05 = 5:15

と書いてください。

【アンケート】

五条件法で5つのレベルで表わされています、それぞれの質問にあてはまる数字に○をつけて下さい。選べたら中間の3の数字に○をつけて下さい。

【実験終了後の返却】

8月下旬の夏休みの終了までに返送していただければ幸いです。CDと英語の弁論原稿の返却は不要です。アンケートと審査用紙のみ140円切手の貼ってある返信封筒に入れて返送してください。返信封筒を使用しない場合、「ヤマト宅急便」でも構いません。着払いで返送していただく、別の封筒で返信していただく場合は後日送料を返金いたします。(銀行口座にて返金か切手代にて返金いたします)

送付先 〒379-0221 安中市立松井田東中学校
福田昇 宛
群馬県 安中市 松井田町 新堀 236-16
TEL 027-393-1122 FAX 027-393-2903

資料3：英語弁論大会(全体的評価のみによる方式) 審査用紙[日本語版①]

① 英語弁論大会(全体的評価のみによる方式)
—審査用紙—

審査にかかる時間は
ストップウォッチで1分の秒のよりに記入

Title	Name	審査時間と得点
1 Invisible Power	(Miss) Mitsuki Kobayashi	(ストップウォッチで1分 /100点) (全体評価得点:)
2 Words are Like Knives	(Mr) Kenichi Shimizu	(ストップウォッチで1分 /100点) (全体評価得点:)
3 Three Hundred Yen	(Miss) Ayaka Uchibori	(ストップウォッチで1分 /100点) (全体評価得点:)
4 A Smoke on the Ashtray	(Mr) Reira Kuroda	(ストップウォッチで1分 /100点) (全体評価得点:)
5 True Death	(Miss) Mizuho Koitabashi	(ストップウォッチで1分 /100点) (全体評価得点:)
6 A Chance Encounter	(Mr) Hiromu Yamada	(ストップウォッチで1分 /100点) (全体評価得点:)
7 For Someone Else	(Miss) Ayaka Koitabashi	(ストップウォッチで1分 /100点) (全体評価得点:)
8 Smoky Mountain	(Mr) Yoshinobu Kawasaki	(ストップウォッチで1分 /100点) (全体評価得点:)
9 The Day of My Birth	(Miss) Nozomi Yoshida	(ストップウォッチで1分 /100点) (全体評価得点:)
10 Thirteen	(Miss) Shion Kambe	(ストップウォッチで1分 /100点) (全体評価得点:)

1) 審査員のサイン: _____

2) 審査員による上位3名の選出: 1位 _____, 2位 _____, 3位 _____.

資料4：英語弁論大会(全体的評価のみによる方式) 審査用紙[English版①]

① English Oratorical Contest

Title	Name	The time you used to judge: (____ min. ____ sec.) (Total score only: ____/100)
1 Invisible Power	(Miss) Mitsuki Kobayashi	(____ min. ____ sec.) (Total score only: ____/100)
2 Words are Like Knives	(Mr) Kenichi Shimizu	(____ min. ____ sec.) (Total score only: ____/100)
3 Three Hundred Yen	(Miss) Ayaka Uchibori	(____ min. ____ sec.) (Total score only: ____/100)
4 A Smoke on the Ashtray	(Mr) Reira Kuroda	(____ min. ____ sec.) (Total score only: ____/100)
5 True Death	(Miss) Mizuho Koitabashi	(____ min. ____ sec.) (Total score only: ____/100)
6 A Chance Encounter	(Mr) Hiromu Yamada	(____ min. ____ sec.) (Total score only: ____/100)
7 For Someone Else	(Miss) Ayaka Koitabashi	(____ min. ____ sec.) (Total score only: ____/100)
8 Smoky Mountain	(Mr) Yoshinobu Kawasaki	(____ min. ____ sec.) (Total score only: ____/100)
9 The Day of My Birth	(Miss) Nozomi Yoshida	(____ min. ____ sec.) (Total score only: ____/100)
10 Thirteen	(Miss) Shion Kambe	(____ min. ____ sec.) (Total score only: ____/100)

1. Judge's Signature: _____

2. Select the top three & write the order of them: the 1st _____, the 2nd _____ and the 3rd _____.

資料 5 : 英語弁論大会 (分析的評価による方式) 審査用紙 [日本語版②]

② 英語弁論大会(項目別による方式)
-審査用紙-

2012 年

No.: 1 Name: 小林 美月

Title: Invisible Power

* 審査に關わるカテゴリーは下記の通りに 5 つに分けられています。A.L.T と公立中学生の英語レベルを基準に別して協議した結果から分類しました。この結果、スピーチ発表者の「論理的な意見の表明や社会的な事柄への関心・発言」への配点比重は、大学生のスピーチコンテストと比較して小さく致しました。その代わり、英語を外国語として学習する、初期学習者としての中学生を考慮し、学習で取り組んできた「英語の発音やリズム」などへの配点を少し高くしています。

導入の部分 (5)
5 聴衆の注意をひきつける導入

主題の中心となる内容 (30)
10 獨創性 / 話題の選択
10 論理の展開 (論法)
10 論理を展開する題材・体験

結論 (5)
5 印象的なまとめ方

Subtotal: /40

English (40)
20 明確な発音/発音の仕方
20 イントネーション / リズムとストレス

表現力 (20)
20 声質 / 文の割合

Subtotal: /60

気付いたこと:

審査員のサイン: _____ Total: _____ /100

審査の開始から終了までの総時間 (分 秒)

計測時間は 4 分 45 秒のように記入

資料 6 : 英語弁論大会 (分析的評価による方式) 審査用紙 [English 版②]

② English Oratorical Contest
-Guidance on Judgement Procedure-

No.: 1 Name: [Miss] Mitsuki Kobayashi

Title: Invisible Power

* The contest is divided into five general categories as listed below. Given that the contestants range solely within the junior high school level, each section is allotted a specific value, customized for this level. There is a proportionately smaller focus on contestants' ability to dictate complex argumentation and style, and a stronger focus on contestants' ability to articulate a meaningful English speech, in a natural manner.

Introduction (5)
5 Attention Getting

Contents (30)
10 Originality / Choice of Topic
10 Reasoning
10 Use of Support Material

Conclusion (5)
5 Memorable Statement

Subtotal: /40

English (40)
20 Articulation / Enunciation
20 Intonation / Rhythm and Stress

Expression (20)
20 Voice / Rate

Subtotal: /60

General Comments:

Judge's Signature: _____ Total: _____ /100

The time you used to judge: (:)

ex. 5:04 = 5 min. 04 sec.

資料7：英語弁論大会（アンケート用紙）〔日本語版③〕

③ スピーチ評価に関するアンケート

10人のスピーチを聞いて、全体的に感じたあなたの率直な気持ちをお聞かせください。
次のチェックボックスの□に、あてはまると思うところに✓マークをつけてください。

Rating Guide: 数字は五段階で評価をするようになっています。右の評価を参考にしてください：

- 1 = 全く そう思わない。
- 2 = やや そう思う。
- 3 = どちらでもない。
- 4 = やや そう思う。
- 5 = 全く そう思う。

Category	1	2	3	4	5
----------	---	---	---	---	---

Introduction スピーチの始まりの部分

1 独創的な話題である					
2 明確な話題である					
3 信頼性のある話題である					
4 時流に沿った影響力のある話題である					
5 的をしばった話題である					

Body of the Speech スピーチの中心内容

6 話のポイントが明確でしっかりしている					
7 文と文のつながりが効果的である					
8 話される内容を支える理由づけがしっかりしている					
9 体験例が効果的で話題の広がりがある					
10 きちんとしたデータ資料がある					
11 資料の出典根拠が明示されている					

Conclusion スピーチのまとめの部分

12 クライマックスのある終わり方をしている					
13 スピーチの始まりで述べられていたことが関連づけられて要約されている					
14 効果的な終わり方をしている					

Delivery 話し方

15 効果的な時間配分と休止がある					
16 話すことがきれいに発音されている					
17 印象を与えるような、声に変化がある					
18 主題に沿って熱意をもって話している					
19 適切なことばを用いている					
20 声量がある					
21 ユーモアが効果的に用いられている					

Category	1	2	3	4	5
----------	---	---	---	---	---

Speech Evaluation 評価方法について

22 分析的評価は評価が正しくできる					
23 分析的評価は評価項目がわかりづらい					
24 全体的評価方法は時間が短縮できる					
25 全体的評価方法は評価がしやすい					
26 評価方法で結果に相違ができる					
27 評価そのものに自信がない					
28 評価はALTだけでよい					
29 評価は日本人英語教師だけでよい					
30 評価順位は各審査員の総得点の合計で決めればよい					
31 評価順位は各審査員の順位の結果から決めればよい					
32 評価得点の下限を決めて、極端な得点差がでないようにする					
33 評価では英語の発音やリズムは最も大切である。					
34 評価では話の内容が最も大切である。					
35 評価では個人の体験に基づいたものが最も大切である。					

Miscellaneous 今回の審査評価ではなく、スピーチ一般のことについて

36 聴衆に合わせたメッセージを持っている					
37 聴衆に興味を引き起こさせる					
38 聴衆との相互交流のあるスピーチ					
39 制限時間を守るスピーチであること					
40 適切な服装をしている					
41 ノート等の資料を見ないでスピーチをする					
42 アイコンタクトがしっかりしている					
43 姿勢がしっかりしていること、自然な体の動きであること					
44 表情がゆたかで、フレンドリーであること					

資料 8 : 英語弁論大会 (アンケート用紙) [English 版③]

Please take a minute to share your honest feelings after listening to the 10 students' prepared speeches. Please circle the appropriate letter for each category evaluated.

Rating Guide: Use your assigning letters on each point:

1. **SD** = Strongly Disagree
2. **D** = Disagree
3. **N/D** = Neither agree or Disagree
4. **A** = Agree
5. **SA** = Strongly Agree

Category	SD	D	N/D	A	SA
----------	----	---	-----	---	----

Introduction

1	Very creative attention grabber.	SD	D	N/D	A	SA
2	Introduced topic clearly	SD	D	N/D	A	SA
3	Established credibility with audience.	SD	D	N/D	A	SA
4	Showed how topic affects audience.	SD	D	N/D	A	SA
5	Clearly previewed each main point.	SD	D	N/D	A	SA

Body of the Speech

6	Main points clear and distinct.	SD	D	N/D	A	SA
7	Connections between ideas are clear and effective.	SD	D	N/D	A	SA
8	Main points supported well.	SD	D	N/D	A	SA
9	Extended examples vivid & effective.	SD	D	N/D	A	SA
10	Topic appeared to use credible sources of research.	SD	D	N/D	A	SA
11	Sources clearly revealed.	SD	D	N/D	A	SA

Conclusion

12	Climactic ending: prepared audience for ending.	SD	D	N/D	A	SA
13	Summarized main points of speech.	SD	D	N/D	A	SA
14	Effective ending.	SD	D	N/D	A	SA

Delivery

15	Timing/Pauses: delivered speech with pause for dramatic effect.	SD	D	N/D	A	SA
16	Articulation: words were spoken clearly.	SD	D	N/D	A	SA
17	Vocal Quality: used vocal variety to add impact.	SD	D	N/D	A	SA
18	Delivery Manner: communicated enthusiasm for topic.	SD	D	N/D	A	SA
19	Language accuracy: appropriate for audience.	SD	D	N/D	A	SA
20	Excellent volume: power in your voice.	SD	D	N/D	A	SA
21	Humour: appropriate, reinforced message, entertaining	SD	D	N/D	A	SA

What do you think about the two different evaluation systems?

22	Analytic evaluation form yields more accurate results than general evaluation.	SD	D	N/D	A	SA
23	Analytic evaluation form is ineffective compared to general evaluation.	SD	D	N/D	A	SA
24	General evaluation saves time.	SD	D	N/D	A	SA
25	General evaluation is easier for evaluation than analytic evaluation.	SD	D	N/D	A	SA
26	The two ways of evaluation can cause different results.	SD	D	N/D	A	SA
27	I am not confident as a judge.	SD	D	N/D	A	SA
28	Evaluation should be done only by ALTs.	SD	D	N/D	A	SA
29	Evaluation should be done only by Japanese English teachers.	SD	D	N/D	A	SA
30	Evaluation ranking should be done by the total sum of the judges.	SD	D	N/D	A	SA
31	Evaluation ranking should be done by the total sum of each judge's ranking result.	SD	D	N/D	A	SA
32	Minimum total score should be decided before in order to avoid extremes in evaluations.	SD	D	N/D	A	SA
33	Pronunciation and rhythm of English are the most important criteria for evaluation.	SD	D	N/D	A	SA
34	The content is the most important criteria for evaluation.	SD	D	N/D	A	SA
35	Personal experience is the most important criteria for evaluation.	SD	D	N/D	A	SA

Miscellaneous

(This is a question about your idea for speech contests in general.)

36	Speaker's message should be adapted to the people in the room.	SD	D	N/D	A	SA
37	Speaker should hold the interest of the audience.	SD	D	N/D	A	SA
38	Speaker should have great interaction with the audience.	SD	D	N/D	A	SA
39	Speech should be strictly completed within the time limit.	SD	D	N/D	A	SA
40	Speaker should be dressed appropriately	SD	D	N/D	A	SA
41	Speaker should have No Notes: Speech should be delivered solely by memory.	SD	D	N/D	A	SA
42	Speaker should have good Eye Contact: established visual bond with the audience.	SD	D	N/D	A	SA
43	Speaker should have Good posture & Body movement: natural, purposeful, expressive, smooth.	SD	D	N/D	A	SA
44	Speaker should Be expressive: animated, friendly, genuine.	SD	D	N/D	A	SA

資料9：研究協力者一覧(平成24年度現在の勤務先)

No.	氏名	勤務先
1	Gregory Morrison	群馬県伊勢崎市教育委員会学校教育課
2	Jennifer Turner	群馬県安中市教育委員会学校教育課
3	Samantha Corpuz	群馬県安中市教育委員会学校教育課
4	Lisa Gulbrandsen	群馬県安中市教育委員会学校教育課
5	Emily Wilson	群馬県安中市教育委員会学校教育課
6	Stephen Ferrier	群馬県高崎市教育委員会学校教育課
7	津久井 貴之	群馬県教育委員会事務局義務教育課指導主事
8	金井 幸光	群馬県前橋市教育委員会
9	中本 晋	群馬県大泉町教育委員会
10	吉田 章仁	群馬県前橋市立春日中学校教諭
11	伊藤 里恵子	群馬県伊勢崎市立第二中学校教諭
12	田野辺 陽子	群馬県伊勢崎市立第三中学校教諭
13	橋本 英明	群馬県伊勢崎市立第三中学校教諭
14	森村 洋子	群馬県伊勢崎市立第三中学校教諭
15	船津 悠人	群馬県伊勢崎市立第三中学校教諭
16	清水 綾介	群馬県安中市立松井田東中学校教諭
17	小金澤 宏寿	群馬県安中市立松井田南中学校教諭
18	伊藤 美奈子	群馬県安中市立松井田東中学校教諭
19	山田 幸代	群馬県安中市立松井田南中学校教諭
20	松本 哲夫	群馬県安中市立松井田北中学校教諭
21	長岡 涼太	群馬県安中市立第一中学校教諭
22	田中 和夫	群馬県安中市立第二中学校教諭
23	橋本 真樹	群馬県高崎市立豊岡中学校教諭
24	吉川 吉信	群馬県高崎市中尾中学校教諭
25	吹田 妃良	群馬県高崎市立高松中学校教諭
26	佐藤 由美子	群馬県安中市立第二中学校教諭
27	五十嵐 豊	群馬県藤岡市立東中学校教諭

No.	氏名	勤務先
28	中島 真紀子	群馬県南牧村立南牧中学校教諭
29	栗栖 博愛	群馬県桐生市立梅田中学校教諭
30	神戸 智宏	群馬県下仁田町立下仁田中学校教諭
31	高山 美紀	群馬県前橋市立桃川小学校教諭
32	河野 和幸	群馬県立利根実業高等学校教諭
33	星野 昌明	群馬県立前橋高等学校教諭
34	野澤 秀樹	群馬県立桐生工業高等学校教諭
35	中島 利恵子	群馬県立高崎女子高等学校教諭
36	根岸 小百合	群馬県立榛名高等学校教諭
37	信澤 博美	群馬県立中央中等教育学校教諭
38	河内 健志	群馬県高崎市立高崎経済大学講師
39	鈴木 崇元	群馬県立渋川高等学校教諭
40	上原 亜里沙	群馬県立渋川青翠高等学校教諭
41	小坂橋 徹治	群馬県立富岡高等学校教諭
42	金井 宏晃	群馬県立伊勢崎高等学校教諭
43	内田 富明	群馬県私立明照学園樹徳高等学校教諭
44	河内 里美	栃木県佐野市立南中学校教諭
45	藤井 大	千葉県立稲毛高等学校教諭
46	小西 一央	千葉県立成田国際高等学校教諭
47	高木 文雄	千葉県立成田国際高等学校教諭
48	細 喜朗	千葉県立浦安南高等学校教諭
49	根本 栄一	新潟県立長岡工業高等学校教諭
50	佐藤 優子	新潟市立新津第五中学校教諭
51	中山 弥那子	新潟県私立関根学園高等学校教諭
52	細田 侑花	新潟県立長岡工業高等学校教諭
53	山田 智也	新潟県佐渡市立羽茂中学校教諭
54	福田 暢大	新潟大学理学部数学科4年
55	江村 健介	東北大学大学院国際文化研究科博士課程2年
56	日吉 信秀	神奈川県大井町立湘光中学校教諭
57	茂手木 直人	埼玉県小川町立東中学校教諭
58	伊藤 久	秋田県五城目町立第一中学校教諭
59	瀬田川 仁子	秋田県立秋田北高等学校教諭
60	鈴木 武秀	石川県立金沢錦丘中学校教諭
61	甲斐 紗衣子	石川県小松市立向本折小学校教諭